

私は今から十数年前に「産業カウンセラー」の存在を知り、資格を取得しました。そこで初めて「傾聴」と出合い興味を持ち始めました。当時は今ほど傾聴という言葉が世の中に認知されていなかったように記憶しています。傾聴について自分なりに勉強を進めていくうちに、さらに興味が沸き実践できる場を

ナビゲーター

求め、地元で活動している傾聴をベースにしたボランティアグループ「ふれあい」の存在を知りました。

早速参加させていただくと今度は、皆さんと学習会で学んだことを実践の場に出て研鑽(さん)を積みたいという気持ちがあるまで以上に強くなってきました。ボランティアメンバーの動きは早く、あるグループホームへの

30

産業カウンセラーの現場から

相談者の思いに共感して相対する

寄り添うことの重要性学ぶ

訪問が決まりました。毎月1回、半日の訪問でしたが、そこには十数名の人生の大先輩が生活されていました。活動内容は、歌、折り紙などを行い、また時には一緒におやつを食べ、特別な取り決めもなく自由な雰囲気でお話を伺うというものでした。

ご利用者さんの中にはお話しが出来ない方も数名おみえになり、どうしたら傾聴できるのかと、戸惑う場面も多々ありました。全くお話しが出来ない方と初めて対面した時のことです。私は何もできずただそばに居るだけでした。3、4回とお会いする回数を重ねるうち、表情の無かった方のお顔が若干緩み、ニコッと微笑まれたように感じました。これ

傾聴ボランティア活動

が「寄り添う」ということなのかと思いましたが、「寄り添う」ということではないでしょうか。ただそばに居てお顔を見ている、2人でボーっとしているだけでした。少し大袈裟(げさ)かもしれませんが、その方の今までの人生を拝見させていただいているような感覚にもなりました。

この貴重な体験が、私に多くの学びと、大切なものは何かを気付かせてくれたことを思い出します。お話しを聴くことだけが傾聴のすべてではなく、例えばお話しができなくてもただ寄り添う、暖かい気持ちと一緒に居ることを体感出来たことで、傾聴というスタンス(かまえ・姿勢)の深みを少し味わえたような気がします。漢字の「聴」を分解すると、

まさに耳を立て(聴という漢字の「へん」に当たる部分)、目と心で(「つくり」に当たる部分で目と心をプラスしている)「寄り添う」ということではないでしょうか。

現在は、コロナ禍で訪問自体中止になっています。このような時だからこそ、安全対策を十分に行った上でお伺いし、直接ふれあい、またそばに居て寄り添いたいと思うのですが、今は安全第一ですので、何もできないことが残念でなりません。一日も早く皆さんの元気な姿を拝見し、お声を聴くことができる日を楽しみにしています。

【日本産業カウンセラー協会中部支部会員
・産業カウンセラー・国家資格キャリアコンサルタント・2級キャリアコンサルティング
技術士 杉浦啓文】

(火曜日掲載)

